２、息継（いきつぎ）井戸、花岳寺編（花岳寺境内略図参照）

　　①「息継ぎ井戸」

こちらが、息継ぎ井戸です。井戸のまわりへ来て下さい。音声の説明が３分間ありますので聞いて下さい。（スイッチON、OF）

今、説明がありましたようなことで、息継ぎ井戸と言います。

こちらへおいで下さい。（井戸南側の旧上水道の構造について説明する。四角い石の井戸枠を指して）これが、赤穂では井戸と言いますが、実際は上水道の汲み出し桝です。深さは１．５ｍ位です。このような井戸が、各家々の台所の土間にあり、あちらの城下町時代からの道路の中央、約７０ｃｍの地下に上水道の本管、太さ３０ｃｍ位の土管があり、井戸と接続するのに、私の足下に見えるような太さ１０ｃｍ位の給水管、これは黒い瓦管ですが、古い物では孟宗竹（もうそうちく）の節を抜いたものもあります。この黒い管は見えるように上へあげていますが、実際は地下７０ｃｍ位下にあるわけです。

この古い上水道は、浅野家が赤穂へ来る２９年前、１６１６年に姫路城主の池田家が造り、浅野家が拡張しました。

現在は、上水道としては使用されていませんが、土管などの一部は道路の下に残っています。

　 　　　　　　　②「 井戸から花岳寺までの道」

今、皆さんが歩いているこの道は、４００年前に出来た城下町の中の道です。道の特徴としては、ちょっと行きますと、T字路（ていじろ）になります。戦略上敵が攻めてきても、赤穂城まですぐに行けないようにしたからです。

③「花岳寺山門の前」

こちらが浅野家の菩提寺（ぼだいじ）の花岳寺です。浅野家の後の永井家、森家の菩提寺にもなっています。宗派は禅宗の曹洞宗（そうとうしゅう）です。本山は福井県の永平寺と神奈川県の総持寺（そうじじ）です。

④「二代目大石名残の松」

この立派な松は、「二代目大石名残（なごり）の松」です。初代の松は、左の建物の中にある二本の太い枯れた幹です。元禄１４年（１７０１）刃傷事件の起きる１０年前、元禄４年に大石内蔵助の母親（松樹院）が亡くなり、冥福を祈り内蔵助が植えたのですが、２３０年後の昭和２年に枯れました。

名残の松とは、元禄１４年の事件後、大石が赤穂を去るに当たり、本堂裏の大石家の先祖の墓にお詣りし、松の木に別れを告げ、名残を惜しんだことによります。

⑤「本堂前」

このお寺は、１６４５年に浅野家が茨城県笠間（かさま）から赤穂へ来て、初代の長直（ながなお）公が、赤穂浅野家の菩提寺として建てました。

本堂の上の屋根と下の屋根間に「華嶽寺（かがくじ）」の額がありますが、字画の多い難しい字なので、大石内蔵助の手紙にも、現在使っている字画の少ない「花岳寺」と書いています。

正面の白い垂れ幕（たれまく）に家紋（かもん）が２つありますが、右は浅野家の「違い鷹の羽（ちがいたかのは）」で鷹の羽根が×印になっています。左は「二つ巴（ふたつともえ）」の大石家の家紋です。

本堂を入って天井を見て下さい。大きな墨絵があります。この絵は江戸時代の終わり頃（１８５４）に赤穂の絵師、法橋義信（ほっきょうよしのぶ）という人が５月の端午（たんご）の節句の幟（のぼり）として描いたものです。

義士墓所、木像館などへ入館しない場合は⑨の「鳴らずの鐘」へ進む。

　⑥「義士墓所前」

こちらの「忠義塚」は義士の５０回忌（切腹４８年目＜１７５０＞）に建てました。碑文（ひぶん）は、大石主税の幼な友達であった竜野の藩儒（はんじゅ）、藤江熊陽（ふじえゆうよう）が撰び、藤田東閣（赤穂の藩医）が書いています。

墓所入り口の左側の「三代目忠義桜」は赤穂城内の大石内蔵助の屋敷から移し植えたもので、右側の「二代目不忠柳」は、城内の大野九郞兵衛の屋敷から移しています。

義士墓所の中へお入り下さい。正面の大きなお墓が、浅野家三代目長矩（ながのり）公、右が大石内蔵助、左が大石主税の墓で、周囲が４５人の義士のお墓です。墓には遺髪が埋められていると言われ、本当の墓は、東京、泉岳寺の墓です。

義士の３７回忌（１７３９）に建てました。お墓の順番は右から格式順に建てられています。禄高（ろくだか）順ではありません。

戒名の一番上に刃（やいば、にん）の文字が入っているのは、切腹したということです。

　左の最後は、寺坂吉右衛門（きちえもん）、この人は切腹していませんので刃の文字はありません。吉良邸に討ち入ったのは４７人、泉岳寺へ引き上げる途中で逃げたという説もありますが、本当は、大石内蔵助が命令して、討ち入りの様子を知らせるための生き証人として生かしたと思います。討ち入りの時３８才、亡くなったのは８３才です。

⑦「義士木像堂」

正面の、ご位牌は、吉良に斬りつけた長矩公のものです。その後ろの厨子（ずし）の中の小さな仏像は千手観音（せんじゅかんのん）で、大石家の守り本尊です。討ち入りの時、大石内蔵助は懐に納めて大願成就しました。

大石は討ち入りの翌日、元禄１５年１２月１５日に、この千手観音と、吉良のとどめをさした短刀（観音妙理剣＜宝物館にある＞）とを、手紙を添えて、ここ花岳寺へ送りました。

　右側の義士木像は大石内蔵助を大将とした表門隊２３体、左側は大石主税を大将とした裏門隊２４体です。服装は、火消し装束で、討ち入りの時の姿です。目印として両袖口に白い布を付けていました。

木像は、義士の３３回忌から１００回忌の間に造り納められました。

最年長は、表門隊の堀部弥兵衛（やへえ）７７才、最年少は、大石主税、１６才（かぞえどし）です。

⑧「義士宝物館」

宝物館を案内します。右下に短刀がありますが、これは、大石内蔵助が、吉良上野介のとどめをさした短刀です。以前長矩公からほうびとして戴いたもので、吉良の首と共に墓前に供えたものです。

こちらの達磨（だるま）の絵は、大石内蔵助が描いたもので、頭の右に大石の雅号の「可笑」が見られます。

こちらは、浅野家五代の肖像画です。１番右は、家祖の浅野長政（ながまさ）公です。この人の正室は「やや」と言い、豊臣秀吉正室の「ねね」の妹です。つまり、長政は秀吉の義理の弟になります。年齢は秀吉より８才年下です。

豊臣政権では五奉行の一人で、甲府藩２２万５０００石の藩主です。関ヶ原の合戦では、徳川側についたので、長男の幸長（よしなが）は和歌山城主３７万６０００石になり、二代目の時に国替えで広島４２万６０００石になり明治まで浅野本家として続きました。

２番目は長政の三男長重（ながしげ）公で、父長政の隠居料５３５００石を相続して、茨城県笠間城主になりました。

３番目は長重の長男、長直（ながなお）公で、この人の時、国替えで笠間から赤穂へ移りましたので、赤穂浅野家では初代となります。

４番目は、長直の長男、長友（ながとも）公で赤穂二代目です。

１番左は長友の長男、長矩（ながのり）公で三代目です。

赤穂浅野家は、この長矩公の起こした刃傷事件によりお家断絶となったわけです。５７年間の三代赤穂藩主でした。

　こちらに「大石好みの杯（さかずき）」又は「掟（おきて）の杯」と言います赤い杯があります。大石内蔵助が自分を戒めるために作ったと言います。杯の中の金色の高札に五ケ条が書いてあります、それをながめているのは自分です。

五ケ条は

　　一、喧嘩口論するな

　　二、さされた杯を下に置くな

三、飲めない相手にむりに進めるな、但し飲める相手にはどんどん進めよ

四、もう飲めなくなったからと、杯の酒を空いた食器などに捨てるな。

五、飲めるからと卑しそうに他人の酒まで飲むな、但し女性が飲むのに困っている　　　　ときは助けてやるべし。

　現代でも通じる酒席でのマナーです。内蔵助は酒が余程好きだったのでしょう。

　⑨「鳴らずの鐘」

こちらの鐘は、赤穂浅野家二代藩主長友公が、父長直公の菩提のため奉納されたもの

です。

元禄１６年（１７０３）２月４日、赤穂義士４６人が切腹した知らせが赤穂に届き、町の人が悲しみこの鐘をつきまくったため、音韻が狂いました。そのため「鳴らずの鐘」と言われるようになったそうです。但し、今ある鐘は、１８００年頃に新しく改鋳したものです。

⑩「水琴窟（すいきんくつ）」

手水鉢（ちょうずばち）の右にある黒っぽい瓶（かめ）のようなものは、水琴窟と言い、地元の陶芸家＜赤穂雲火焼き＞が作って奉納したものです。どなたか手水鉢の水をすくって、上の大石内蔵助の像にかけて下さい。瓶の中から妙なる水の音が聞こえます。　これで、花岳寺の案内を終わります。